話題９１：新春干支随筆　　子年に思う～後ろ向きに生きる～

新春のお慶びを申し上げます。

職場に決まって年に２回、献血車が廻ってくるため欠かさずに献血を行ってきた。さてと、今年もと、何気なく向かったところで受付係の一言に立ち止まった。「先生、今年で最後ですね・・・献血は７０歳からは対象にならないので」と。

学会の合間をぬって金沢、兼六園の散策にと向かった。入場券を購入しようとしたところ、受付での一言。「身分証明書を見せてください、６５歳以上は、入場料は要りませんので」と。自らの意思とは無関係に年齢を意識させる社会の仕組みになっている。

光陰、「矢」には例えられない速さで過ぎ去る。何とか、そのスピードを落とす方策を考えないといけない。何気なく、「後ろ向きに生きる」ことを思いついた。従来、前向きでないこと、後ろ向きは消極的な態度として否定されてきた。後ろ向きの生き方を正当化する理論を構築しないといけない。

細胞分裂を支配する染色体には、安全装置としての「テロミア」なる構造があるという。細胞は分裂を繰り返すたびに、この安全装置は擦り切れていく。安全装置が擦り減って、結果として「細胞死」があるとのこと。そうだ、「運命」とは、未来にあるのではなく、後から追いかけてくるものなのだ。定年という区切りからも、そのような気がしていた。

私は、父親を知らない。５人兄弟の４番目。私が３歳、妹が生まれて半年、親父は仕事上の怪我で亡くなった。田舎の小学校は１学年２５名の小さな学校で、中途、複式学級を経験した。中学３年生まで電気とは無縁、石油ランプの生活であった。

小学校５年生。隣に住む叔父が野球のグローブを買ってくれた。毎日、校舎の壁に向かってピッチングの練習。その音を聞きつけて、先生がキャッチボールの相手をしてくれた。中学３年まで投手として活躍できた。

高校時代は電気のもとでの下宿生活。大家さんの励ましで、大学進学までこぎつけた。高校時代に出会ったスペイン人の神父さんから、生き方の方向性を教わったような気がする。

激動の大学生活。大学紛争の嵐。１０か月ものストライキ。社会に目を向ける機会になった。６か月の卒業延期の処分。良き友のおかげで何とか卒業。

消化器外科の研修中途で沖縄に戻った。先輩の勧めで結婚。尊敬する呼吸器外科の先輩の背中を追って国立病院へ移動。３５年間の充実した勤務となった。

マザー・テレサの言葉を大切に秘めている。「思考には気をつけなさい、それはいつか言

葉になるから。言葉には気をつけなさい、それはいつか行動になるから。行動には気をつけなさい、それはいつか習慣になるから。習慣には気をつけなさい、それはいつか性格になるから。性格には気をつけなさい、それはいつか運命になるから」。

箇条書きでの出会いの記録である。患者さんを含めて、多くの出会いの中で、「今」があり、「運命」は、その中にある。後ろ向きに、修正しつつ、恩返しの時としたい。感謝。

（沖縄医報　５６（1）：１４００、２０２０）